

第65回海外日系人大会 17カ国より155名が東京に集結!

当協会は、9月17日(水)から19日(金)の3日間、東京で第65回海外日系人大会を開催した。昨年、一昨年に続き、会場での対面参加に加えてオンラインでライブ配信を行うハイブリッド開催とし、東京の会場には17カ国より155名、オンラインには20カ国より265名の参加登録があった。

「混迷と不安が深まる世界とニッケイ社会～新たなつながりを求めて」を総合テーマとした今大会では、依然として終わりの見えない戦争や対立、移民やマイノリティに対する排外主義の広がり等、混迷する世界情勢を背景に、そのような時代だからこそ日系人、ニッケイ社会として何ができるのか、ニッケイ社会が示す新たなつながりとはどういったものか等について、基調講演や上映会、国際シンポジウムを通じて意見を交わした。

※記事中の肩書きは全て、同大会開催時のもの。



石破内閣総理大臣祝辞を代読する青木副官房長官

DAY-1

開会式

初日は、JICA市ヶ谷ビルの国際会議場で開会式を行った。主催者として挨拶した田中克之理事長は、移住者・日系人の方々が戦時中の強制収容や強制退去、差別等の苦難に遭遇しながらも、それぞれの居住国で現在の地位を築き上げてきたことについて触れ、これは近年世界中で顕在化している「分断と対立」とは相反する「共生社会の実現」に貢献するものであったと述べた。そして、今大会では、改めて日系社会が辿ってきた道を振り返り、共生社会の実現と、それを維持するためにニッケイ社会は何をすべきか、何ができるのかについて実り多い議論を期待したいと述べた。

続いて、青木一彦内閣官房副長官が石破茂内閣総理大臣の祝辞を代読した。石破総理は祝辞の中で、内閣総理大臣として就任以来、ブラジル、ペルー、フィリピンを訪問して日系の方々と直接触れ合ったことについて言及し、日本と世界中の日系人との絆をより大切にしたい、日本を日系の方々がルーツとして誇れる国にしたいと述べた。

参加国紹介では、司会者が今大会の参加国を読み上げると、国旗を持った参加者が立ち上がって居住国をアピールした。メキシコの参加者からは、「ビバ!メヒコ!」の大きなかけ声が



参加国紹介で盛り上がるメキシコからの参加者

上がり、会場を沸かせた。

開会式で海外参加者を代表して挨拶したペルー日系人協会のホルヘ・イゲイ会長は、世代が新しくなるにつれて日本との繋がりが薄れているように感じられるかもしれないが、実はグローバル化とテクノロジーの進歩によって日本との距離は近くなり、繋がりの深まっていると述べた。若い世代の日系人がニッケイとしてのアイデンティティに目覚め、先人のレガシーを守る活動に積極的に参加するようになっていくことに触れ、世界各地のニッケイ社会において、日系人が受け継いできたレガシーを次世代に継承するために共に取り組んでいこうと呼びかけた。

(P2に続く)

DAY-1

基調講演

ブラジル日本文化福祉協会 名誉会長 石川 レナト



石川レナト氏の基調講演

今大会の基調講演には、ブラジル日本文化福祉協会の名誉会長である石川レナト氏にご登壇いただいた。ビジネスマン、経営者としてだけでなく、ブラジルにおけるニッケイ社会のリー

ダーとして長年にわたり培ってきたご経験を通じて、現在の世界情勢、移民に向けられているマイナス感情等に日系人がどう向き合うのか、多文化共生社会の実現に向けて日系人が果たすべき使命は何か等についてお話しいただいた。

冒頭、ブラジルで生まれ育った日系2世として、1世たちが子供たちの教育を最優先にしてきたことや、自身も幼いころから当たり前のように農作業を手伝い、働きながら学校に通ったこと、民間企業に就職したのち、NECブラジルの社長として様々な課題の解決等に取り組んできたこと、その後不動産業界で起業し、現在はコーヒー農園「ファゼンダ・アリアンサ」を経営してヨーロッパや日本へコーヒー豆を輸出していること等が語られた。

また、ブラジルのニッケイ社会の歴史を振り返りながら、両国の文化の違いこそがえって両国を結ぶ架け橋となり、互いを豊かにしていると話した。一方で、現在世界中で増加している排他的な発言や偏見、フェイクニュースなどの影響により、不当な扱いを受けている移民の立場についても言及した。国境を越えて異なる文化の中でアイデンティティを築くことの難しさをよく知る日系人だからこそ、できる使命がある。それは対話の促進であり、多様性の尊重であり、新しい繋がりのために絆を新たにすることだとした。そして、各国のニッケイ社会がその協力関係をさらに深めるだけでなく、若い世代の主体性を引き出していくことが最重要だと指摘した。さらに、この「若い世代」の中には、日本にルーツを持たなくても日本文化を愛するすべての人々を含めるべきだし、そうした新しい世代が創るニッケイ社会の未来に希望を繋いだ。

そして、65回の歴史を刻んできた海外日系人大大会が、過去を尊重するとともに、未来を構想して世界の平和に対するコミットメントを再確認する機会になることを信じていると結んだ。

「Removed by Force」上映会、メリッサ・クニヨシさんミニライブ

基調講演の後には、第二次世界大戦中のハワイにおける日系人の迫害と人権侵害についてとりあげたドキュメンタリー作品「Removed by Force」を上映した。上映後、同作のプロデューサーであるウィリアム・カネコさん、ライアン・カワモトさんの2名がハワイからオンラインで参加し、会場からの質問に答えた。



熱唱するメリッサ・クニヨシさん

この日、オンラインによるライブ配信はここまでとなったが、会場ではブラジル日系3世の歌手、メリッサ・クニヨシさんによるミニライブが行われた。幼少期よりブラジルのテレビ番組等で度々その歌声を披露してきたメリッサさんは現在、日本の大学に進学し歌手活動と並行して勉学にも励んでいる。この日は、夏川りみさんの「涙そうそう」、八代亜紀さんの「愛を信じて」、ディズニー映画「塔の上のラプンツェル」の主題歌である「輝く未来」の3曲を伸びやかに歌い上げた。

参加者歓迎交流会

夕刻には、会場を永田町の実業クラブに移し、秋篠宮皇嗣同妃両殿下のご臨席のもと、海外日系人協会主催の歓迎交流会を行った。9月に当協会会長に就任したばかりの阿部守一長野県知事（全国知事会会長）が主催者として挨拶した後、メキシコから参加した日墨協会の三井広一会長が乾杯の挨拶を行った。乾杯後、両殿下は参加者のテーブルを回られて約40分間にわたり親しくご懇談された。

歓迎交流会には、海外参加者のほか、関係国の大使、国会議員、関係団体、当協会賛助会員メンバー等、国内からも多数の参加があり、久しぶりの再会を喜ぶ人々や名刺を交換して新たな繋がりを作る様子が見られ、にぎやかな交流の場となった。



秋篠宮皇嗣同妃両殿下のご臨席のもと開催した歓迎交流会

DAY-2

国際シンポジウム

大会2日目は、ユース会議の報告から始まった。近年の大会では、若い世代、いわゆる「ユース」の参加が増えており、今大会でも参加者の半数近くがユースとなった。昨年、一昨年は、海外日系人大大会の終了後にユース参加者を集めた「日系ユース交流会」というプログラムを、大会とは別枠で開催してきたが、今回はユース参加者の声をもっと大会に反映させたいという思いから、初日の開会式前に「ユース交流



国際シンポジウムで発表に聞き入る参加者

会」を実施。そこで話し合われた内容を、過去の大会において分科会のひとつとして実施していた「ユース会議」の報告という形で発表してもらうことになった。

ユース交流会には、60名の若者が参加し、今大会の総合テーマと連動する形で、「外国人コミュニティに対する偏見と誤った情報が広がる中で、日本にいる日系人の若者は日本社会にどのように具体的に貢献できるか?」ということを中心に話し合った。グループに分かれて意見を交わし、お互いの体験談を共有する中で、1.日本国内における偏见的な情報拡散に見られる課題、2.教育の課題、3.外国籍住民との間におこる文化的衝突という3つの課題に焦点が当てられた。その結果、日本の大学院レベルで学んでいる日系の学生たちが、それぞれの研究や学問の成果を日本社会に発信することで、専門分野の発展に貢献するだけでなく、マイノリティに対するネガティブなイメージを打破していきたいこと、コミュニティからより正確でポジティブな情報を積極的に共有・拡散すること、文化交流イベントの実施や参加を促進することで互いの理解を深めること等が提案された。

パネルディスカッション①「新たなつながりを求めるニッケイ新世代」



パネルディスカッション①

大会2日目の午前中に
行われたパネルは、アン
ジェロ・イシ武蔵大学教授
(当協会常務理事)をモデ
レーターとし、若い世代の
パネリスト4名が登壇した。

ジャーナリストのダシル
バ・サミー・ケンジさんは、デ

カセギでブラジルから来日していた両親の後を追って5歳の時に来日。名古屋市で育ち大学の経営学部を卒業。現在は物流業界の専門紙で記者として働き、日系ブラジル人の働く現場を中心に、外国人労働に関する取材執筆を重ねている。日系人に関する記事を執筆してきた経験の中で感じた課題として、日本社会に順応している日系人の経験がコミュニティに還元されていない現状、その結果、日本で学び、育った世代が在日日系社会の課題に取り組む主体として不足していること等を挙げた。また、移民に関する課題解決に向けた対話と行動を目的に立ち上げた私的勉強会「シーク」の活動についても紹介した。「シーク」では、さまざまなテーマで議論を広げ、議事録を公開することで課題や知識を立体的に可視化することを目指しているという。日本に順応した新世代が議論し、経験を共有することで、知識の偏りや思い込みをなくし、課題解決にあたる仲間を増やしたいと語った。

ハワイ出身のダニエル・マツダさんは、4世ビザを取得して来日。その後在留資格を「技術・人文知識・国際業務」に変更することで滞在期間を延長し、現在は都内の企業で働いている。日本で暮らすことで、自身の日系としてのアイデンティティを新たな視点から探求できていると

言い、その実現にあたり4世ビザの存在は不可欠であったと語った。4世ビザの申請手続きの複雑さや、使い勝手の不便さもあるものの、4世ビザ制度の制定は日本と海外ニッケイ社会とのつながりを強めるための非常にいい機会となったことを強調した。

生後3カ月で来日し、在日日系2世として育ったブラジル日系4世の旭田ラリッサ香さんは、現在武蔵大学大学院の修士課程で学んでいる。社会学の視点から、在日ブラジル人の経験や、二つの国の間で帰属意識を感じられる場所を探す葛藤について研究している。日本で暮らす日系の若者の多くが、言語や金銭的な理由から工場労働を選ぶ状況にあることを指摘したうえで、自らが大学院まで進学できた恵まれた立場であること、声を届けられる立場にいることを生かし、将来はジャーナリストとして、依然として不可視化され続けている在日ブラジル人コミュニティの声を届けていきたいと話した。

日本で弁護士として活動している知念友介さんは、デカセギでブラジルから来日し、派遣切りなどで苦労した両親の姿を見て育ったことから、日本で困っている外国人を助けたいと弁護士を目指したという。交通事故や家族法についての相談が多いが、日本とブラジルの法制度の違いをいかに理解してもらうかが課題だと話した。南米由来の積極性や社交性と、日本由来の勤勉さの両方を兼ね備えたハイブリッド人材である日系人は、様々な分野で活躍できる可能性を持っていると話し、自身の経験を伝えることで若い世代に希望を与えたいとした。



左から、ダシルバさん、マツダさん、旭田さん、知念さん

パネルディスカッション②「ニッケイ社会を動かす女性の力」



左から関口さん、貴志さん、クボタさん、藤木さん

午後のパネルは、中井良則元日本記者クラブ専務理事(当協会常務理事)がモデレーターを務め、4人の女性パネリストに発表いただいた。

元在マナウス日本国総領事の関口ひとみさん(当協会理事)は、ブラジルのニッケイ社会において、日本の伝統文化の継承、特に食文化の普及にきわめて重要な役割を果たしてきた日系女性の活躍について話した。現在、2世から3世、4世と続く日系女性は、日本人の美德にブラジル人特有の陽気さや創造力を兼ね備えて、グローバルな課題に対応するリーダーとして、プレーヤーとして活躍していることが紹介され、日本人のDNAを持つ女性たちの力は、世界が必要としている平和への強力な武器となるべきだと締めくくった。

ブラジル出身の2世として1990年代に来日し、日本で起業した貴志マルシア光子さんからは、日本社会の中で女性社長として、さらに外国人として直面した苦労や経験を紹介。言葉の壁や制度の複雑さ、家族(特に夫)の理解とサポートの必要性などについて提言したうえで、移民女性の起業を後押しする制度や支援策、女性起業家同士のネットワーク構築や、幼少期からのジェンダー平等教育の必要性等を訴えた。

ハワイで弁護士として活躍するクリスティーン・クボタさんからは、ハワイへ「写真花嫁」として渡った日本女性の歴史と経験、祖母の人生と自分自身のこれまでの活動や、祖母と自身との共通点などが紹介された。戦時中の強制収容によるアメリカ社会への適応と同化、最近の米国で起こっているDEI(多様性・公平性・包括性)施策が撤廃され

る動きをめぐる議論などについても言及しながら、日系女性の貢献を再評価した。

オランダから参加した藤木きよさんからは、オランダ人男性との結婚を機にオランダへ移住し、オランダで移住者として歩んできた人生が紹介された。日本人とオランダ人の文化的な摩擦を解消するための婦人交流会「おらんだ会」の発足や、オランダに暮らす日本人のための無料相談窓口の設立のほか、オランダで活躍している4人の日本人女性について紹介。オランダで生まれた子どもの二重国籍に関する課題についても問題提起を行い、日本でも重国籍の早期実現を望むとした。

最後に、フィリピン日系人会連合会のマリヤリ・イネスP・山之内会長がビデオ出演し、フィリピン社会におけるジェンダー平等の推進についてや、女性リーダーが広く活躍している現状等が紹介された。また、戦後80年を迎える現在もなお、多くの日系2世が無国籍状態にあることについても触れ、国籍回復の必要性を訴えた。

オフィシャルツアー(さいたま市視察)

大会2日目の国際シンポジウムに参加しない人々のために用意したオフィシャルツアーでは、さいたま市を訪問した。氷川神社を参拝した一行は、その後、さいたまスーパーアリーナに隣接するけやきひろばに移動し、思い思いに昼食を楽しんだ。午後は造幣局さいたま支局の「造幣さいたま博物館」を見学した。9月とはいえまだまだ暑さの厳しい1日となったが、氷川神社の境内は豊富な木々がほどよい日陰を作り、参加者はボランティアガイドの案内に熱心に耳を傾けていた。



氷川神社での記念撮影

外務大臣主催レセプション



岩屋外務大臣の挨拶

を通じ、多くの日系人の人々との出会いを経て、日系人の皆様が多くの苦難を乗り越え世界各地で、また世代を超えて活躍されてきたこ

大会2日目の夜には、岩屋毅外務大臣主催の歓迎レセプションが外務省飯倉公館にて開催された。岩屋大臣は挨拶の中で、外務大臣としての国内外での活動

とに深い感銘を受けたとし、政府として、日系人との連携を強化し、共に歩んでいきたいと話した。

参加者を代表して挨拶したハワイのクリスティーナ・クボタさんは、「私たち日系人は、それぞれに特別なストーリーを心に持ちながら、日本と、いまそれぞれが母国とする国で頑張っています。日系人である事に誇りを持ち、歴史と先祖からの精神と力で、日本と母国が世界平和のリーダーとなるよう頑張っています」と力強く話した。



ユース参加者たち

DAY-3

日系人の主張・在日日系人スピーチ・大会宣言発表



日系人の主張でのスピーチ

大会最終日の9月19日は、午前中に「日系人の主張」と「在日日系人スピーチ」、そして前日の国際シンポジウムを経て採択された「大会宣言」の発表が行われた。

「日系人の主張」には10名が登壇し、思い思いのテーマでひとり5分間のスピーチを行った。大会の総合テーマに縛られることなく、日系人・ニッケイ社会に関することであれば自由なテーマで発表することが可能なため、近年人気のプログラムとなっている。今大会でも、留学プログラムの紹介や日本語教育、所属団体の活動紹介、自身のファミリー・ヒストリー、県人会の重要性、食文化等、多岐にわたる内容で発表いただいた。

「在日日系人スピーチ」では、日本で暮らす日系の若者3名が日本語でスピーチを行った。3名からは、自身が日系人であることの意味をどのように感じているのかについてや、10年後の自分自身へ向けたメッセージ、祖父の遺志を受け継ぐ覚悟等が力強く語られた。

その後、前日の国際シンポジウムで討議された内容をもとに採択された今大会の「大会宣言」を参加者が発表した。(P5に全文掲載)

衆参両議院議長主催昼食会

この日のお昼には、海運クラブにて衆参両議院議長主催の歓迎昼食会が開催された。関口昌一参議院議長の挨拶に続き、海外参加者を代表してブラジル出身、現在日本財団日系スカラーシップの奨学生として慶應義塾大学の博士



在日日系人スピーチ

課程に在籍している篠原ラリッサ多美さんが謝辞を述べた。篠原さんは謝辞の中で、「今大会に登壇した女性リーダーの皆さんのように、より多くの女性がビジョンを持ち、世界を変えていけるような社会と一緒に築いていきたい。国籍やジェンダー、肌の色の違いは分断ではなく、より強い社会を作るための大切な力となる」と話した。

額賀福志郎衆議院議長が乾杯の発声を行った後は、参加した参議院議員の牧野たかお氏、衆議院議員の吉田宣弘氏、堀内詔子氏、松島みどり氏、岡本あき子氏がそれぞれ自己紹介を行い、参加者と親しく交流した。昼食会を最後に、今大会3日間のプログラムをすべて無事終了した。



衆参両議院議長主催昼食会で謝辞を述べる篠原さん

ブラジル日本架け橋交流プロジェクト



今年も2名の若者を招へい ～はじめての来日に大興奮!～

今年も、竹内政司氏(竹内運輸工業社長・当協会監事)からの指定寄付金による「ブラジル日本架け橋交流プロジェクト」で、ブラジルから若者2名が第65回大会に参加した。招へいしたのは、サンパウロ州からブラジル日本文化福祉協会の青年委員会所属のグラジエラ・タマナハさんと、ゴイアス州からゴイアス日伯文化体育協会所属のフェリペ・トヤマ・ワタナベさん。ブラジルでの書類選考と面接を経て、2名ともに初めての来日を果たした。

9月15日に来日し、日系ユース交流会も含め大会3日間のプログラムすべてに参加した2名は、3日目の「日系人の主張」にも登壇。タマナハさんは、自身の日系社会との出会いや、日本まつりでのボランティア活動、文協青年部での経験等を紹介し、これから若いころの自分が必要としていたような人になることを目指したいと抱負を語った。ワタナベさんは、ゴイアス州日系人協会青年部で最年少の青年会長として直面した課題や活動を紹介したほか、ゴイアニア

盆踊りフェスティバルが、在ブラジル日本国大使より「世界最大かつ最高の盆踊り」と称されていることについても紹介した。

都内では、浅草やスカイツリー、渋谷、新宿などへも積極的に繰り出し、日本の「いま」を貪欲に体験したほか、9月22日には横浜を訪れ、JICA横浜 海外移住資料館を視察。当協会スタッフとの懇親会にも参加し、その後は日が暮れるまで横浜中華街やみなとみらいでのショッピング、夜景を楽しんだ。

大会に参加したことで、さまざまな国の日系人と直に交流できたこと、秋篠宮皇嗣殿下とお話できたこと等、素晴らしい経験になったと話す2人は、「また絶対に日本に来たい!」と目を輝かせながら、それぞれの帰途について。



タマナハさん(中央)とワタナベさん(右)。出資者の竹内氏と。

＝第65回海外日系人大会宣言＝

日系レガシーを礎に、連携して多文化共生社会の実現と維持に取り組みます

2025年9月19日

私たち、第65回海外日系人大会（2025年9月17日～19日 東京で開催）に世界各地から参集した日系人は、「混迷と不安が深まる世界とニッケイ社会～新たなつながりを求めて」を総合テーマとして討議し、以下の5項目からなる決議を本大会の成果として宣言します。

1.【日系人の歴史を踏まえ、連携して多文化共生社会の実現と維持に尽力します】

世界各地に移住した日本人とその子孫は、長い歴史の中で人種差別、第2次世界大戦中の強制収容、強制退去など様々な苦難に遭遇しましたが、日本人・日系人の徳性とされる誠実、勤勉、我慢強さなどをもってこれを乗り越え、居住国や地域の発展に大きく貢献してきました。しかし、第2次世界大戦の戦後80年に当たる今、世界では、戦火がやまず、偏見や偽情報がSNSで拡散し、戦争の教訓を忘れたかのように、異なる存在を排除する動きや社会の分断が深まっています。多くの移住者が、私たちの祖先が体験したような差別や偏見にさらされています。

私たちはそのような状況を懸念するからこそ、多様な文化的背景や価値観を尊重し、対話による相互理解と包摂を基盤とする社会の実現とその維持に努めます。また、今次大会にあわせ、日本に在留する学生を中心とした若い日系人60人が最近の内外の状況やその影響にどう対処すべきかを議論し、その内容を大会に報告しました。特に、日本で偽情報や誤った情報により在住外国人への偏見が広がる現状を憂慮し、日本で学ぶ若い日系人がより正確な情報を発信したいと訴えました。このように次世代の日系人が海外日系人大会に関心を寄せ、自分たちの意見を報告したことは連携を強める動きであり、評価します。

2.【日系女性の社会文化発展への貢献を誇りとし、また、在日日系人の次世代の活躍を期待します】

今次大会のパネルディスカッションでは日頃取り上げられることが少ない「日系女性の力」と「若い日日系人の活躍」が取り上げられました。

日系社会や日系人が住む地域社会の発展に、世代を超えて日系女性たちが大きな役割を果たしてきました。パネルディスカッションでも日本文化の発信、地域社会の発展など幅広い分野で築かれた女性の功績が顕著であることが浮き彫りになりました。私たちはその貢献の大きさを誇りに思うと同時に感謝します。また、日本で育った次世代の在日日系人から、二つの文化的背景を持つことを強みとして活躍する人たちが増えているとの報告がありました。日本の習慣を理解し、日本語を含

む複数の言語を使いこなし、日本社会を元気づける次世代の日系人に期待します。

3.【日本を体験する日系人を増やすため、日系人の若者を日本に招く事業を拡充するよう求めます】

日本政府や地方自治体、各団体による様々な日本招へいプログラムによって、多くの日系人が日本で学び、その経験や知識を自国に持ち帰り、ニッケイ社会や地域社会の発展のために貢献してきました。日本が遠い存在になりがちな若い日系人が、日本の生活や文化を直接、体験すれば、日本への親近感をより密接に感じることができるでしょう。このため、私たちは前述の招へい事業を評価するとともに、対象を広げ、内容を充実させるよう求めます。招へいプログラムに参加する日系人の若者がさらに増え、日本体験を積み重ねて、在住国と日本との架け橋の役割を果たすよう期待します。なお、日本・ブラジル間ではワーキングホリデー制度の導入が検討されており、私たちはこれを歓迎します。

4.【日本の外国人政策について、排外主義に陥らず、事実に基づいた議論を期待します】

最近、日本でも「外国人政策」をめぐる議論が高まっています。正面からこの問題について議論し取り組むにあたって、誤った情報や感情論に左右されることなく、事実に基づき「多文化共生社会を目指す」ものであることを期待します。また、互いに尊敬できる多文化共生施策を作るうえで、受け入れる側の日本人とともに当事者である日系人や外国人の意見も反映することが重要です。

5.【4世ビザの抜本的改正と国籍法改正を求めます】

「4世ビザ」の申請件数は依然として低調です。受け入れサポーター制度、年齢制限、家族不帯同、定住化容認要件（滞日年数、年齢制限、日本語レベル）についての要件の大幅改正や撤廃を検討するよう引き続き日本政府に求めます。また、共生社会を実現し、日本人と日系人が世界で活躍できるように、在住国と日本の両方の国籍を維持できるような国籍法の改正は欠かせません。国籍喪失規定と国籍選択制度の廃止を検討するよう引き続き日本政府に求めます。

富山県人会世界大会、初の開催



9月26日～28日の3日間にわたり、富山県で「富山県人会世界大会」がはじめて開催された。現在、海外の富山県人会は北米に4つ、南米に3つ、アジアに9つの合計16団体が存在するという。はじめての開催となった今大会には、アメリカ、ブラジル、アルゼンチン、中国、台湾、シンガポール、インドネシア、ベトナム、フィリピンの8カ国・1地域の県人会から参加があり、国内7つの県人会とあわせて150名ほどが参加した。

初日の夜に開催された歓迎夕食会では、各県人会のPR等が行われた。翌27日には記念式典、講演会のほか、ビジネスセミナーや若手交流会、晩さん会などが行われた。最終日には、ふるさと巡りツアーも開催された。

27日に行われた講演会には、当協会の田中克之理事長（富山県出身）が講師として招かれ、「日本人移民の歴史と日系社会の次世代承継～承継に当たり考えるべきこと～」というテーマでお話した。講演では、日系人・日系社会について、その歴史的背景を紹介したほか、日系人の居住国への貢献や、日本にとっての日系人・日系社会の存在、近年の日系社会の様子、次世代継承にあたって考えるべきこと等について、スライド資料を用いて説明した。

県人会の代表らによる会議では、海外の若い世代にも富山県に関心を持ってもらうために、研修会や留学生を受け入れること、県人会の会員がアンバサダーとなり富山の魅力を発信することなどが話し合われ、大会宣言も採択された。

日系社会 Topics

国際紅白歌合戦 大阪万博のステージで熱唱

今年で13回目の開催となった「国際紅白歌合戦」が、9月19日に大阪で開催された。日本人が外国語で歌い、外国人が日本語で歌うことをコンセプトに毎年開催されている国際交流イベントで、歌を通じて新しい多文化共生のメッセージを世界に伝えることを目的としており、当協会も毎年後援している。

今回は、大阪観光局の協力を得て、大阪関西万博会場での開催となった。アメリカ、ブラジル、アイルランド、オーストラリア、ベナン、インドネシア、ミャンマー、ベトナム、ネパール、中国など、10カ国以上の国から、20組90名が参加し、ブラジルのサンパウロからは、7月に現地で開催された予選を勝ち抜いた2名が参加。大阪市とサンパウロ市との姉妹都市交流助成プログラムとして、前日にはブラジルバビロンの表敬訪問も行われた。

当日は、大屋根リング内東側のフェスティバル・ステーションにある定員300名のホールに入りきれないほどの観客が集まり、会場の外でもたくさんの人が歌声を聴くほどの大盛況イベントとなった。

本の紹介 「海の向こうに見た夢～チリと日本を結ぶ、100年の家族史」

鹿児島県の田舎町で生まれ育った小野太兵衛（1895-1969）は、20代前半でチリへ渡り、チリ海軍の退役提督の運転手の仕事を得た。やがて生花や果物の栽培で生計を立て、チリに家族をつく

り、その子孫たちはそれぞれの人生を歩んでいる。

両国の小野/Honoファミリーには「日本（チリ）に親戚がいる」という話が伝わっていたが、太兵衛と兄・敏男の死後、その交流は長らく途絶えていた。だが、一人の青年ミノル・オノ（太兵衛のひ孫）がチリから日本にやってきたことで、物語が大きく動き出す。

日本語、スペイン語、英語の3言語版を収録。3章構成となっており、第1章では、2019年に「世界青年の船」のチリ代表メンバーとして初来日を果たし、帰国後すぐに4世ビザを取得して日本に住み始めたミノルと、日本の親族との出会いを軸に、現在の家族の姿が描かれている。第2章では、資料や子孫の証言をもとに、太兵衛の波乱に満ちた人生が歴史的背景とともに紐解かれる。そして第3章では、2023年に日本の小野家メンバーがチリを訪問した記録を中心に、両家族の交流と絆の再生が描かれている。

日本とチリにまたがる小野/Honoファミリーの、100年にわたる歩みをたどった家族史プロジェクトの集大成。単なるファミリーヒストリーにとどまらず、自らのルーツや文化をどのように受け継ぎ、多文化社会の中でどう生きるか。そんな問いに向き合うすべての人に、勇気と希望を届ける1冊となっている。

※本書は、海外日系人協会Webサイトにて受託販売を行っています。



著者：笠戸丸プロジェクト編集
発行者：小野卓
発行所：ジャラン開発株式会社
印刷・製本：有限会社青史堂印刷
発行日：2025年9月18日
ページ数：224頁、日本語・英語・スペイン語の3言語対訳
価格：1,980円（税込・送料別）

NIKKEI No.66
海外日系人協会だより *Network*
2025 OCT.

発行／（公財）海外日系人協会 〒231-0001 神奈川県横浜市中区新港2-3-1 JICA横浜2F
TEL:045-211-1780 FAX:045-211-1781
E-mail:info@jadesas.or.jp URL:www.jadesas.or.jp 編集発行人／椿 秀洋



JICA 横浜 海外移住資料館
カナダ日系文化センター・博物館（NNMCC）巡回展示

BROKEN PROMISES

破られた約束

—太平洋戦争下の日系カナダ人—

2025.8.15 [Fri]

12.7 [Sun]